



Title	学生の経験から捉える大学教育の現状と課題：日中米の国際比較研究
Author(s)	陳, 麗蘭; 中口, 悦史; 川嶋, 太津夫
Citation	大阪大学高等教育研究. 2025, 14, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102848">https://doi.org/10.18910/102848</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 学生の経験から捉える大学教育の現状と課題

——日中米の国際比較研究

陳 麗蘭<sup>\*1</sup>・中口 悦史<sup>\*1</sup>・川嶋 太津夫<sup>\*1</sup>

## Understanding Higher Education Dynamics from Students Experiences: A Comparative Study of Japan, China, and the United States

CHEN Lilan<sup>\*1</sup>, NAKAGUCHI Etsushi<sup>\*1</sup>, KAWASHIMA Tatsuo<sup>\*1</sup>

大学教育の重要性は、個人・社会・国家の各レベルにおいて多面的に認識されており、学生個人の成長と社会全体の発展にとって極めて重要な役割を果たしている。学生経験は、大学教育を評価するための重要な指標の1つである。本研究は、日本・中国・米国の3か国における大学教育の特徴や課題を明らかにすることを目的とし、各国の学生経験を比較分析することで、大学教育の現状と課題を浮き彫りにすることを目指す。本研究で使用したデータは、学部生を対象とした国際学生調査（The Student Experience in the Research University, 以下SERU）である。分析の結果、日本の大学におけるDEI関連の支援や啓発活動は、他国と比較して十分に進展していないことが明らかとなった。そして、日本の大学教育は講義形式が主流であり、授業の質や履修のしやすさ、科目の豊富さに関しては比較的高い満足度が示されているものの、創造的思考や知識の応用に関する項目では、中国や米国の学生に比べて低い評価となった。このような教育形式は、学生と教員、または学部・学科とのコミュニケーションの機会が限られていることを示唆しており、授業外での意見交換の機会も少ない傾向がうかがえる。さらに、日本の学生は、一般的に精神的な問題を抱えている割合は低いとされる一方で、教員や所属組織との関係性が希薄であることから、帰属意識が相対的に低いという結果も得られた。一方、中国の大学では多様な授業が提供されており、学生にとっての選択肢が広いことが示された。ただし、学修支援プログラムの設計や情報提供、アクセス体制には他国と比べて利用上の障壁が存在しており、依然として改善の余地があると考えられる。また、授業の質の保証および管理体制についても課題が残されている。さらに、中国では大学レベルの満足度は高いものの、学部・学科レベルの満足度が相対的に低く、大学と学部・学科の間における支援や教育環境のギャップが存在していることが示唆された。加えて、教育の価値に対する認識や所属大学への帰属意識は3か国の中で最も高いという肯定的な結果が得られた一方で、メンタルヘルスに関する問題は日本の学生と比較して有意に深刻であることが明らかとなった。他方、米国ではアクティブラーニングの導入が一般的であり、学生は学習支援体制やディスカッションの機会に恵まれている。授業科目にとどまらず、学外活動や学修支援プログラムに対する評価も他国に比べて特に高い結果が得られた。ただし、米国の学生は3か国の中で最も深刻なメンタルヘルス問題を抱えていることも明らかとなった。本研究は、3か国の大学生の学習経験を比較することで、それぞれの教育システムの現状と課題を明らかにし、今後の教育改善に向けた示唆を提供するものである。

キーワード：大学教育、学生経験、現状、課題、国際比較

所 属：<sup>\*1</sup>大阪大学スチューデント・ライフサイクルサポートセンター

Affiliation：<sup>\*1</sup>Center for Student Success Research and Practice, The University of Osaka

連絡先：lilanchen.slics@osaka-u.ac.jp（陳 麗蘭）

University education is widely recognized at individual, societal, and national levels. Student experience is one of the key indicators for evaluating university education. This study aims to identify the characteristics and challenges of university education in Japan, China, and the United States (U.S.) by conducting a comparative analysis of student experiences. This study utilized data from an international student survey, named The Student Experience in the Research University (SERU), specifically focusing on the experiences of undergraduate students, although the broader dataset also includes graduate student responses. The analysis revealed that support and awareness-raising activities related to DEI at Japanese universities are less developed compared to those in other countries. Additionally, while Japanese university education is primarily lecture-based and shows relatively high levels of student satisfaction in terms of course quality, accessibility, and the variety of course offerings, lower evaluations were observed in items related to creative thinking and knowledge application when compared to students in China and the U.S. This educational format appears to limit opportunities for communication between students and faculty, as well as between students and their departments, with few opportunities for informal exchanges outside of class. Moreover, while students in Japan are generally considered to have fewer mental health issues, the limited interactions with faculty and departments are associated with a comparatively lower sense of belonging. In contrast, Chinese universities offer a wide range of courses, providing students with more choices. However, there are greater barriers to access in terms of the design of learning support programs, information provision, and accessibility when compared to other countries. Issues also remain in the areas of quality assurance and management of course content. Additionally, while overall satisfaction at the university level in China is high, satisfaction at the department or faculty level is relatively lower, indicating a gap between institutional and departmental experiences. Furthermore, students in China showed the highest levels of perceived educational value and institutional belonging among the three countries. However, their mental health issues were found to be significantly more serious than those of students in Japan. In the U.S., active learning is widely adopted, and students benefit from well-established learning support systems and frequent opportunities for discussion. Students also gave particularly high ratings not only to academic courses but also to extracurricular activities and academic enhancement programs. However, students in the U.S. were found to face the most severe mental health issues among the three countries. This study provides insights into the learning experiences of university students across three countries and identifies current issues and challenges within their respective higher education systems. These findings are expected to contribute to future educational improvements.

Keywords : University education, Students experiences, Current status, Issues, International comparison

## 1. はじめに

大学教育は、個人の知的成長だけでなく、社会全体の発展にとっても極めて重要な役割を果たしている。大学での学びは、単なる専門知識や技術の習得にとどまらず、批判的思考力の育成、多様な価値観の理解、グローバルな視点の涵養にも貢献する。さらに、大学教育は、経済成長や技術革新を促進し、社会の持続可能な発展に寄与する基盤として機能する。そのため、各国において大学教育の質の向上と発展が政策課題として重視されてきた。

大学教育の重要性は、個人・社会・国家の各レベルにおいて多面的に認識されている。個人レベルでは、大学教育を受けることにより、より高度な職業スキルを身につけ、社会的・経済的な成功を収める可能性が高まる（濱名ほか、2024）。また、大学での経験を通じて、異なる文化や価値観を持つ人々と交流する機会が増え、多文化共生の意識が育まれる（西村ほか、2023）。一方、社会レベルでは、高等教育機関が提供する知識と研究成果が、科学技術の発展やイノベーションの促進につながる（溝上、2021）。大学はまた、地域社会との連携を強化し、地域活性化や社会問題の解決に貢献する役割を担ってい

る（大藪，2022）。さらに，国家レベルでは，教育の普及と高度人材の育成が，国際競争力の強化や持続可能な発展に直結する（川合，2016）。特に，グローバル化が進む現代社会において，国際的な人材の育成は，各国にとって喫緊の課題となっている（西村ほか，2023）。

しかしながら，大学教育が果たすべき役割やその効果は，国や地域によって異なり，制度，文化，経済状況，政策の影響を大きく受ける。例えば，日本，中国，米国の3か国における大学教育は，それぞれ独自の歴史的背景や社会的要因によって形成されており，その特性は大きく異なる。日本では，少子化が進行する中で大学の競争が激化し，大学の国際化と大学教育の質保証が課題となっている。一方，中国では，経済成長とともに大学教育の拡大が急速に進み，国内外の優秀な人材を惹きつける戦略が展開されている。米国では，伝統的に高等教育の多様性と競争力が高く，研究大学の役割が非常に重要視されているが，教育費の高騰や格差の問題も指摘されている。

大学教育の評価において，学生の経験は重要な指標の1つである。そして，大学教育の質や学習環境，支援制度の効果を測る上で，学生自身の視点は不可欠である（Chen and Kawashima, 2025）。学生の学習経験，満足度，学習経験やキャリア形成などを分析することで，各国の高等教育の特徴や課題を明らかにすることができる。特に，学生の視点から，日本，中国，米国の大学教育現場の比較を通じて，それぞれの強みと課題を浮き彫りにし，より良い教育政策のあり方を探ることが可能となる。

本研究では，日本，中国，米国の3か国を対象に，学生経験の分析を通じて各国の大学教育の現状と課題を明らかにし，それぞれの特性や共通点を比較・分析することを目的とする。具体的には，大学の学習環境，学部・学科からの支援，授業への期待，指導教員・授業担当教員や大学院生TAの評価，学生の満足度，帰属意識，ウェルビーイングなどといった項目を，マクロレベル，ミドルレベル，ミクロレベル，学習レベルの4つのレベルに分類し，それぞれに焦点を当てて調査を行う。本研究を通じて，大学教育の質向上に向けた示唆を得るとともに，グローバルな視点から持続可能な高等教育のあり方を考察する。本研究の成果が，今後の高等教育政策の改善や大学運営の指針となることを期待するとともに，学生一人ひとりの学習体験の向上にも寄与する。

## 2. 先行研究

### 2.1 各国の高等教育システムの概要

#### 2.1.1 日本の高等教育システム

日本の高等教育は，国立大学，公立大学，私立大学の3種類の機関によって運営され，主に文部科学省をはじめとする省庁のさまざまな取り組みによって発展してきた。文部科学省は大学政策を統括しており，特に2004年の国立大学法人化以降，大学の自主性が求められる一方で，財政的な競争が激化している（Oba, 2007）。また，日本の大学教育は講義中心の授業が多く，他国と比べて学生が授業に出席する時間が多くとも，学生の学習エンゲージメントが他国と比べて低い傾向が指摘されている（齊藤ほか，2016）。さらに，近年はスーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）などを通じて国際化が推進されているが，その効果については議論が続いている（Yonezawa, 2011）。

#### 2.1.2 中国の高等教育システム

中国の高等教育は，急速な拡大とともに質の向上が求められる段階にある。1990年代以降の「211プロジェクト」「985プロジェクト」により，エリート大学の強化が進められたが，2017年に導入された「双一流政策」では，より包括的な発展が重視されている。また，一帯一路などの政策によって，教育・研究の国際交流を推進し，沿線国の学生を積極的に受け入れることで人的ネットワークの強化を図り，中国の高等教育のさらなる発展が効果的に促進されると共に，インフラ整備や経済連携の強化を通じて周辺各国の発展や国際協力が加速している。さらに，中国の大学も依然として講義型授業が主流であり，特に地方の大学では受動的な学習スタイルが多い。学生は学生自治・学生組織などの課外活動に多く参加しているが，学生の自主的な組織運営や大学経営への関与が制限されるケースが多いため，本当の意味でのエンゲージメントには課題が残っている（秦ほか，2025）。

#### 2.1.3 米国の高等教育システム

米国の高等教育は，分権的で多様な制度が特徴であり，公立・私立大学が共存している。カーネギー分類に基づき，研究大学，リベラルアーツ・カレッジ，コミュニティ・カレッジなど，多様な高等教育機関が存在する。また，学生の学習エンゲージメント（NSSE調査など）を重視し，対話型の授業が主流である（Kuh, 2009）。さらに，成績評価や進級基準が厳しく，学業成績が卒業後

のキャリアに大きく影響を与える点も、日本や中国と異なる特徴である (Pascarella & Terenzini, 2005)。

以上のように、各国の高等教育システムにはそれぞれ特徴がある。日本の大学は制度的に安定しているが、学生の学習エンゲージメントが低い傾向にあり、中国は制度改革が進みつつも、学生参加の内容は制限されるケースが多い。一方、米国は多様な教育機関と柔軟な学習機会を提供するが、学生の大学運営・政策決定への参加について、キャンパスが政治的な対立の場になることが多く、自由な議論が難しくなるケースも増えている。本研究では、こうした制度的な違いを踏まえ、学生の学習経験の違いを分析する。

## 2.2 各国における学生経験に関する研究

学生経験の研究は、大学教育の質向上や政策立案において重要な役割を果たしている。特に、大学教育の成果を学生の視点から評価し、学習環境や支援体制との関連を分析する研究は、近年国際的にも注目を集めている (Astin, 1997)。日本・中国・米国の高等教育機関で勉強する学生の経験を分析する研究も増加しており、それぞれの国における最新の制度や国際的な動きが学生経験に与える影響についての議論が進められている。

### 2.2.1 日本

日本では、1990年代以降、高等教育の大衆化（マス化）が急速に進み、大学進学率が上昇した。これに伴い、教育の質の維持や学習成果の向上が重要な課題として浮上し、高等教育の在り方が問われるようになった（市川, 2003）。大学の拡大に伴う財政問題や運営改革の必要性が指摘され（羽田, 2007）、近年では、デジタル技術の進展に対応したオンライン教育の発展（村上, 2023）、アクティブラーニングの導入や学生のエンゲージメントの促進など、教育方法の改革が進められている（山田, 2018）。

こうした変化の中で、大学教育の質を測る視点として、学生の学習経験に注目した研究が近年増加している。従来、大学の評価は主に大学ランキングや教員の研究業績を基準としていたが、学修者本位の教育の重要性が高まるにつれ、学生がどのように学び、どのような経験をしているのかを分析することが、教育の質向上に不可欠であるとの認識が広まっている。

例えば、小方（2008）は、学生のエンゲージメントが大学教育のアウトカムを規定する最も重要な要素である

ことを指摘し、大学教育の成果を測定するための学生調査の意義について論じた。特に、学生が授業にどれだけ積極的に関与しているかが、学習成果に与える影響の大きさを示し、教育改革の方向性として、エンゲージメントの向上が不可欠であることを強調している。佐藤ほか（2023）は、新入生へのインタビューを通じて、大学生が日常生活をどのように経験し、どのような大学観を形成しているのかを明らかにした。また、オンライン教育の導入と学生の学習経験の関係についても、注目すべき研究がある。中村（2022）は、コロナ禍におけるオンライン授業の導入を背景に、大学生の負担感や学習意欲との関係性を分析し、オンライン環境下における学習の課題と可能性を検討した。オンライン授業の柔軟性が学習機会を広げる一方で、対面授業と比較して学習意欲の維持が難しくなることも指摘されている。さらに、学習経験の差異を比較する研究も進められている。Chenほか（2023, 2024）は、日本のある国立大学を対象に、文系と理系の大学院生の学習経験を比較分析し、大学からの支援の有無、研究科の設備環境、キャンパス文化などが、学生の満足度や学習経験に大きな影響を与えていることを明らかにした。この研究では、研究資源の充実度が研究活動へのモチベーションや学習の成果に直結することが指摘されており、学生に対する支援体制の充実が今後の課題として挙げられている。

### 2.2.2 中国

中国においても、学生の学習経験が大学教育の質や学習成果に与える影響重要な要素とされている。近年の研究では、学生の学習経験が能力の発展や将来のキャリア形成に深く関与していることが指摘されており、特に大学での学びが卒業後の職業選択やキャリア構築にどのように結びつくのかが注目されている（李ほか, 2023）。中国国内の複数の大学を対象に、学生の学習経験がどのように自己効力感（self-efficacy）や社会資本（social capital）の形成に貢献するかを分析し、学習経験の質の向上が学生の能力開発に不可欠であることを示した。そして、大学の種類による学生の学習経験や満足度の違いを分析する研究も進められている。たとえば、中国の一般的な大学と中外合作大学（中外合弁大学）に通う学生の満足度を比較した研究では、それぞれの大学の教育体制や文化的背景が学生の満足度に異なる影響を与えていることが明らかになった（梁, 2024）。この研究によれば、中国の伝統的な大学では、学業成績や試験制度が学生の満足度に大きな影響を与えるのに対し、中外合作

大学では、授業のインタラクティブ性や英語教育環境、グローバルなカリキュラムの導入が満足度を高める要因となっている。また、学生の学習経験の質や学習の効率性に関する研究では、教員の役割、教授法、カリキュラム設計、学習環境の影響が強調されている（邢&刘, 2023）。特に、アクティブラーニングや問題解決型学習（PBL: Problem-Based Learning）の導入が学生の学習意欲を高め、学習の効率性を向上させることが確認され、中国の大学における教育方法の多様化の必要性が指摘され、特に従来の一方向的な講義形式から、双方向的で参加型の授業へと移行することの重要性が強調されている。さらに、正式な学術訓練と学習経験、さらには研究生産性との関連性についても議論されている。黄（2022）の研究では、大学院生を対象に、研究指導の質、研究資源の利用、論文執筆の機会が、学生の研究生産性の向上に大きく寄与することが示された。この研究では、大学院教育における体系的な訓練プログラムの整備が、学生の研究能力を伸ばす上で不可欠であることを強調している。特に、中国の大学院制度において、指導教員の役割や共同研究の機会が学生の研究成果に与える影響が大きいことが指摘されている。加えて、学習経験に影響を与える個人的要因に関する研究も行われている。熊ほか（2019）は、学生の専門分野への熱意が学習経験の質を向上させ、最終的な学習成果にも影響を与えることを明らかにした。この研究では、学生の内発的動機が、学習の深化や探究的な姿勢の形成に寄与することが示されている。さらに、学習経験が個人のキャリア志向や学術的興味的发展にどのように結びつくのかを詳細に分析し、特に専門への興味を高めるための教育施策の必要性が論じられている。

### 2.2.3 米国

米国では、学生の学習経験に関する研究が豊富に蓄積されており、特に学生の学習環境、大学からの支援、学生のエンゲージメントとの関連性が重点的に研究されてきた。Carini et al. (2006) は、学生参加が学習の促進に寄与することを示し、Chuah & Sri Ramalu (2011) は、学生の積極的な関与が学習満足度の向上に寄与することを指摘している。そして、Pekrun et al. (2002) は、学生の学習経験がより優れた学習成果につながることを明らかにした。こうした研究から、学生が大学内で積極的に学習活動に関与し、充実した学習環境のもとで教育を受けることが、最終的な学習成果に大きく影響を与えることが示唆されている。また、米国の高等教育におい

ては、学生のメンタルヘルスとウェルビーイングに関する研究も数多く実施されている。Marx et al. (2024) は、学習経験と精神的健康の関連性を分析し、大学環境が学生の心理的負担やストレスレベルに影響を与えることを指摘した。特に、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた学生の精神的負担については、Son et al. (2020) の研究により、71 %の学生がコロナ禍においてストレスや不安を感じていたことが明らかになっている。このように、米国の大学では、学習経験を単なる学業成果の視点だけでなく、学生の心理的側面や生活環境の影響を含めた多角的な視点から分析する傾向が強い。

さらに、多様性・公平性・包括性（Diversity, Equity, and Inclusion: DEI）に関する研究も、米国高等教育において重要なテーマの一つとなっている。DEIは、組織や社会において、すべての人々が公平に扱われ、尊重され、包摂される状態を目指す取り組みを指している。米国では、多文化社会における高等教育機関の役割が問われる中で、マイノリティー学生の経験と大学環境、支援体制との関係を分析する研究が積極的に行われている。例えば、Cabrera et al. (1999) は、白人学生とアフリカ系米国人学生の大学適応やキャンパスライフの違いを比較し、人種的背景が学生の学習経験に与える影響を明らかにした。また、Solorzano et al. (2000) は、大学の多様化が学生経験、特にマイノリティー学生の学習経験に及ぼす影響を強調し、高等教育機関における制度的な対応の必要性を示唆している。さらに、Hussain & Jones (2021) は、有色人種学生が大学内で経験する差別と帰属意識の欠如に着目し、彼らが感じる社会的・心理的な障壁を分析した。

### 2.3 比較手法を使用した先行研究

各国に焦点を当てた研究は、各国の社会的・制度的背景を反映しながら、それぞれの特徴を明らかにしてきた。一方で、比較的なアプローチを用いて、特定の事例の特徴を分析・解明する研究も数多く実施されている。例えば、専門分野ごとの違いに着目した研究として、Servant-Miklos & Noordzij (2021) は、企画系学生とリベラルアーツ系学生における問題志向型のサステナビリティ教育が学生のアイデンティティに与える影響を調査した。また、ジェンダーに関する比較研究として、Stoet & Geary (2018) は、理科女子の成績が男子と同等かそれ以上であることを指摘し、男女の学業成果に関する通念に対して再考を促している。さらに、時系列比較の視点から、Benaraba et al. (2022) はコロナ禍前

後における観光経営専攻学生のキャリア意識の変化を分析し、パンデミックが学生の進路選択に与えた影響を検討した。同様に、陳ほか（2025）はコロナ禍前・コロナ禍中・コロナ禍後の学生経験の変化を比較する研究を行い、パンデミックが大学生活全般に及ぼした影響を明らかにしている。

国際比較の視点は依然として多くの研究者や教育機関にとって重要な手法であり、これまでに多様な研究が実施されてきた。例えば、学生の学習動機と自主性（Lo, 2024）、オンライン学習に対する学生の認識（Cranfield et al., 2021）、留学生在がコロナ禍において受けた影響（Sato et al., 2022）など、多岐にわたるテーマが扱われている。しかし、日本と海外の大学教育の特徴や学生の学習経験の違いに焦点を当てた包括的な比較研究は、齊藤ほか（2016）を除いてほとんど存在しないのが現状である。しかも、齊藤ほか（2016）では、海外の大学を一括りに比較しており、各国の個別の特徴を分析していない。各国の制度的背景や社会的要因を踏まえた詳細な分析が求められる中、本研究では、日中米の大学生を対象に学習経験を比較し、国ごとの大学教育の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究目的と方法

本研究では、日本・中国・米国の3か国を対象に、学生の経験を通じて大学教育の現状と課題を明らかにし、それぞれの特性や共通点を比較・分析することを目的とする。本研究で使用したデータは、国際学生調査 The Student Experience in the Research University（以下、SERU）のうち学部生を対象とした部分である。

SERUは、世界の主要な研究大学における学生の学習環境や生活状況を調査し、高等教育の質向上を目指す国際的なプロジェクトである。本調査は、大学間でのデータ共有を通じてエビデンスに基づく教育改善を促進し、政策提言や大学運営の向上に貢献することを目的としている。本調査の設計は、カリフォルニア大学バークレー校が主導し、国際基準に基づいた枠組みで管理されている。標準的な質問項目に加え、各参加大学は独自のニーズに応じた追加項目を設定することができ、地域や制度の特性を反映したデータ収集が可能となる。調査は、匿名化された学生データをSERUプラットフォームに共有し、対象学生に専用リンクを通じて回答を依頼する形で実施される。この方法により、データの機密性と信頼性を確保しつつ、学生の多様な視点を包括的に分析する

ことができる。調査結果は、各大学の教育環境の強みと課題を明らかにし、教育プログラムの改善や政策立案に役立てられている。

本研究で使用した調査の回答者数は、日本6,073名、中国1,460名、米国54,507名であった。なお、日本と米国のデータは2022年度および2023年度に実施された大学の総合データであるが、中国のデータは2022年度のものである。ただし、共通質問項目は同じである。

学生経験をより体系的に捉えるために、本研究では佐藤（2019）の枠組みを採用する。佐藤（2019）は、大学や学生の学習経験を四つの層に分けて考えるべきだと主張している。最も上位のマクロレベルでは、大学全体としての教育方針や組織環境が位置づけられる。次に、ミドルレベルでは、学部・学科単位の取り組みが焦点となる。さらに、ミクロレベルでは、個々の教員が実施する授業が含まれ、最も個別的な学習レベルでは、学生自身の学習経験やその反応が分析対象となる。本研究では、上記の4つのレベルの学生経験について探索し、比較分析を行うことにした。

質問項目は、内容に応じて4件法または6件法が用いられた。分析結果は、主に記述統計（パーセンテージ）および分散分析（ANOVA）による3群間の平均値（M）の比較によって示された。なお、すべての項目は統計分析ソフト（SPSS）に入力し処理を行ったが、結果の明瞭な提示を目的として、有意水準を $P < .05$ とし、有意差が認められた項目のみを本研究に掲載した。

### 4. 分析結果

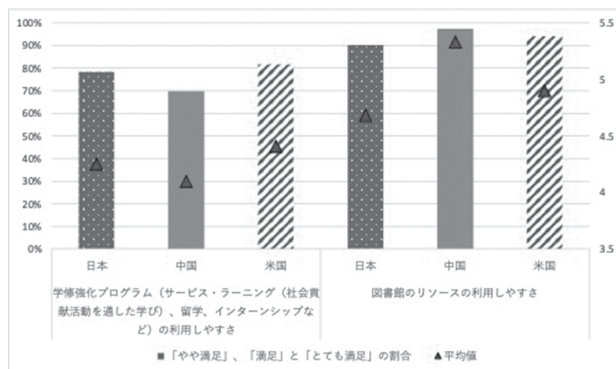
日中米の大学における大学生の学習経験を体系的かつ包括的に捉えるため、学生の経験や所属大学に対する意見・評価に関する項目を、マクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベル、学習レベルの4つに分類した。これにより、異なる側面から学生の現状を分析し、各レベルごとに比較を行うこととした。

#### 4.1 マクロレベル

マクロレベルでは、学修強化プログラムの利用しやすさ、図書館のリソースの利用しやすさ、マイノリティー学生集団に対する大学風土の評価に焦点を当てた。まず、図2に示すように、「学修強化プログラム（サービス・ラーニング、留学、インターンシップ等）の利用しやすさ」に関しては、米国（81.7%）と日本（78.5%）の学生が比較的高い満足度を示しているのに対し、中国では

69.8%と有意に低めの結果となった。TukeyのHSD検定の結果、3カ国間に統計的に有意な差が認められた ( $p < .001$ )。満足度の平均値は、米国 ( $M=4.41$ ,  $SD=1.149$ )、次いで日本 ( $M=4.25$ ,  $SD=1.131$ )、中国 ( $M=4.10$ ,  $SD=1.326$ ) の順であり、米国と他の2カ国との間には有意な差が確認された。これは、中国の学修強化プログラムの設計や学生への情報提供、アクセス体制において、他国よりも利用上の障壁がある可能性を示唆している。一方、「図書館のリソースの利用しやすさ」については、3カ国すべてにおいて非常に高い評価が示された。3カ国間に統計的に有意な差が認められ ( $p < .001$ )、満足度は中国 ( $M = 5.33$ ,  $SD=0.816$ ) が最も高く、米国 ( $M=4.9$ ,  $SD=0.929$ )、日本 ( $M=4.68$ ,  $SD=1.030$ ) の順となった。いずれの国でも図書館の利用環境が良好であることがうかがえる。以上の結果から、図書館リソースの提供に関しては、各国ともに教育環境の基盤整備が進んでいることが分かる。一方で、学修強化プログラムの運用においては、国ごとの制度や学生支援体制に違いがあり、特に中国ではさらなる改善の余地があることが示唆される。

図1 あなたの学部・学科における教育経験について、次の点での満足度を示してください。

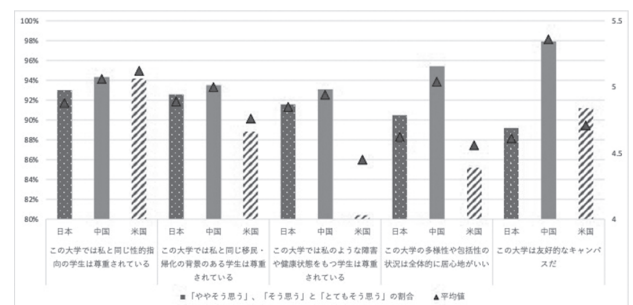


注釈：満足度は「1：非常に不満」から「6：とても満足」までの6段階で評価されている。

また、大学風土に関しては、図2に示すように、性別や性的指向、民族・文化的背景、障害や健康状態が異なる学生に対する受け入れ態勢について調査を行った。結果を分析すると、まず、性別や性的指向の多様性の尊重 (図2左) に関しては、いずれの国においても、90%以上の学生が「ややそう思う」「そう思う」「とてもそう思う」と回答しており、いずれの国でもキャンパスにおける多様性への配慮や支援が一定程度浸透していることがうかがえる。しかし、日本 ( $M=4.88$ ,  $SD=0.969$ ) は、米国 ( $M=5.12$ ,  $SD=0.952$ ) および中国 ( $M=5.06$ ,

$SD=1.005$ ) と比較して有意に満足度が低いことが明らかになった ( $p < .001$ )。一方、米国と中国の間には有意な差は確認されなかった。次に、民族・文化的背景の多様性の尊重については、中国 ( $M=5.00$ ,  $SD=0.950$ ) は、他の2カ国と比較して有意に高いことが示された ( $p < .001$ )。一方、日本 ( $M=4.89$ ,  $SD=0.987$ ) と米国 ( $M=4.76$ ,  $SD=1.137$ ) の間には、有意な差は認められなかった。また、障害や健康状態が異なる学生に対する受け入れ態勢については、米国では満足している学生は80.4%にとどまり、平均値 ( $M = 4.45$ ,  $SD=0.010$ ) も中国 ( $M = 4.94$ ,  $SD=0.052$ ) および日本 ( $M = 4.85$ ,  $SD=1.008$ ) と比較して有意に低い結果となった ( $p < .001$ )。最後に、大学の多様性と包括性に関する総合的な評価については、中国 ( $M = 5.04$ ,  $SD=0.978$ ) において満足している学生の割合が95.4%と最も高く、顕著な評価が示された。一方、日本 ( $M = 4.62$ ,  $SD=0.958$ ) および米国 ( $M = 4.56$ ,  $SD=1.13$ ) でも概ね高い評価が得られているものの、満足している学生の割合には中国との差として約5%の有意な開きが見られた。大学が友好的なキャンパスかどうかについても、3カ国間に統計的に有意な差が認められ ( $p < .001$ )、中国 ( $M=5.36$ ,  $SD=0.834$ ) が最も高く、米国 ( $M=4.71$ ,  $SD=0.974$ )、日本 ( $M=4.61$ ,  $SD=0.994$ ) の順となった。総じて、中国の大学は全体的に包摂性の高い環境を提供していることが分かった。一方で、米国は特に文化的多様性への配慮が顕著であり、全体的に高い評価を受けている。日本の大学は性別や文化的背景の多様性の尊重において、米国や中国と比べてやや遅れを取っていることが分かる。これは、日本の大学におけるDEI関連の支援や啓発活動が、他国と比較して十分に進んでいない可能性を示唆している。

図2 以下の記述に、あなた自身はどのくらい同意するか、選択してください。

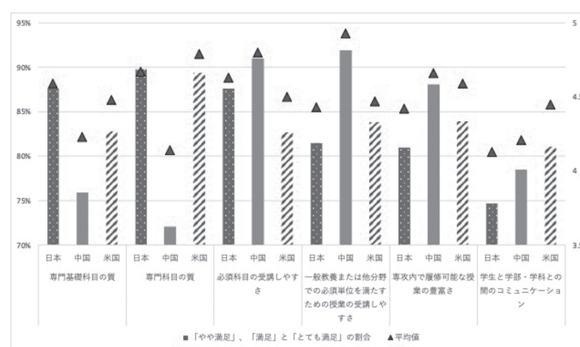


注釈：同意度は「1：まったくそう思わない」から「6：とてもそう思う」までの6段階で評価されている。

## 4.2 ミドルレベル

ミドルレベルでは、主に授業の質、授業の受講しやすさ、学生と学部・学科とのコミュニケーションに関する比較を行った。まず、専門基礎科目および専門科目の質（図3左）については、中国の学生はそれぞれ75.9%（専門基礎科目の質）および72.9%（専門科目の質）が満足していると回答したのに対し、日本と米国の学生はいずれも80%以上の満足度を示しており、両国の方が有意に高い評価を得ている。一方で、授業の受講しやすさや提供の豊富さに関しては、中国の学生が有意に高い満足度を示している。たとえば、「必須科目の受講しやすさ」については、3カ国間に統計的に有意な差が認められ（ $p < .001$ ）、中国の学生の満足度（91.0%）が最も高く、日本（87.6%）、米国（82.7%）の順となった。また、「一般教養科目または他分野での必須単位を満たすための授業の受講しやすさ」に関しても、3カ国間に統計的に有意な差が認められた。中国の学生の満足度は91.1%（ $M=4.93$ ,  $SD=1.004$ ）で最も高い（ $p < .001$ ）。次いで米国では83.8%（ $M=4.47$ ,  $SD=1.121$ ）、日本では最後で、81.5%（ $M=4.43$ ,  $SD=1.15$ ）となっている。このような結果から、中国の大学では多くの授業が提供されており、学生の選択肢が広いことがうかがえる。しかし一方で、授業の質の保証および管理の面では、依然として課題が残されていると考えられる。最後に、「学生と学部・学科との間のコミュニケーション」（図3右）に関しては、国によって評価に有意な差が見られた（ $p < .001$ ）。米国の学生はこの項目において比較的高い評価を示しており、平均値は $M=4.45$ （ $SD=1.231$ ）であった。次いで中国（ $M=4.21$ ,  $SD=1.158$ ）、そして日本（ $M=4.13$ ,  $SD=1.145$ ）の順となり、日本の学生が最も低い評価を示した。これは、米国における学生支援体制やアカデミック・アドバイザーの充実度が高く、学生が教職員との対話や相談をしやすい環境にあることが影響していると考えられる。一方、日本の大学では、教員とのコミュニケーションの機会や方法が限定されているケースも多く、学生が所属する学部・学科との関係において一定の距離を感じている可能性が示唆される。

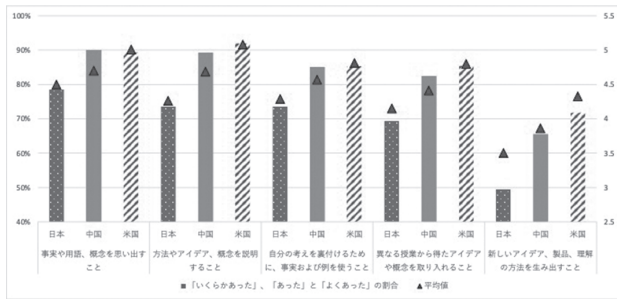
図3 あなたの学部・学科における教育経験について、次の点での満足度を示してください。



注釈：満足度は「1：非常に不満」から「6：とても満足」までの6段階で評価されている。

また、授業中における以下の学習活動の頻度についても調査を行った：「事実や用語、概念を思い出すこと」「方法やアイデア、概念を説明すること」「自分の考えを裏付けるために事実や例を用いること」「異なる授業から得たアイデアや概念を統合すること」「新しいアイデア、製品、理解の方法を生み出すこと」。その結果、図4に示すように、これらの項目に関する頻度は、3カ国間に統計的に有意な差が認められ（ $p < .001$ ）、米国の学生が全体的に最も高く、次いで中国、日本の順となった。特に、「方法やアイデア、概念を説明すること」においては、米国では92.0%の学生があったと指摘しており、平均値は5.08（ $SD=0.994$ ）と非常に高い。一方、日本では73.5%にとどまり、平均値は4.26（ $SD=1.227$ ）と、米国に比べて明らかに低い結果となった。また、「新しいアイデア、製品、理解の方法を生み出すこと」に関しても、3カ国間で顕著な差が見られた。米国では71.9%の学生が求められており、平均値は $M=4.33$ （ $SD=1.398$ ）であったのに対し、中国では65.5%（ $M=3.86$ ,  $SD=1.181$ ）、日本では49.5%（ $M=3.50$ ,  $SD=1.412$ ）であり、日本の学生からの頻度は最も低かった。これらの結果は、各国の教育スタイルの違いを反映していると考えられる。米国ではアクティブラーニングが広く取り入れられており、学生が自ら考え、議論し、応用する機会が多い。そのため、概念の説明やアイデアの統合といった項目に対して、自信を持って取り組む学生が多いと推察される。一方、日本の学生は、創造的な思考や応用に関連する活動に対して相対的に低い頻度を示しており、こうした学習活動への参加機会が他国と比べて限られている可能性がある。したがって、今後の教育方針の見直しや、創造的な学習活動を促進する取り組みの強化が求められる。

図4 あなたの学部・学科における今年度の授業を振り返って、以下の事項はどのくらいの頻度で求められましたか？



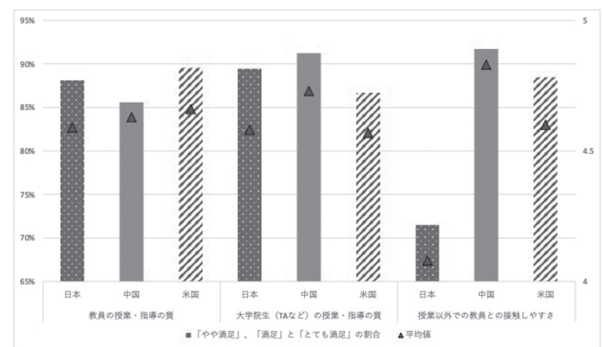
注釈：頻度は「1：まったくなかった」から「6：よくあった」までの6段階で評価されている。

#### 4.3 ミクロレベル

ミクロレベルでは、主に教員や大学院生TAとの関わり、授業の質や教員との接触のしやすさに関する満足度と学生個人の状態について比較した。まず、教員による授業・指導の質（図5左）に関しては、3か国すべてで80%以上の学生が満足しており、満足度の平均値も概ね4.5以上と、高い評価が示されている。中国と米国の大学院生は、教員の授業や指導に対して高い満足度を示しており、特に米国の学生は「やや満足」、「満足」、「とても満足」と回答した割合が最も高く（89.6%）、全体的な評価も高かった（ $M=4.66$ ,  $SD=1.000$ ）（ $p<.001$ ）。一方、日本の学生も比較的高評価（ $M=4.59$ ,  $SD=1.004$ ）を示しており、有意な差が確認されなかったが、中国や米国と比べると低い水準にとどまっている。次に、「大学院生（TAなど）の授業・指導の質」については有意な差が確認された（ $p<.001$ ）。最も高い満足度を示したのは中国の学生（ $M=4.73$ ,  $SD=0.989$ ）で、90%以上の学生が肯定的な評価をしていた。米国の学生も高評価を示し（ $M=4.57$ ,  $SD=1.068$ ）、中国より有意に低い評価であった。日本の大学院生TAへの評価も高いが（ $M=4.58$ ,  $SD=0.979$ ）、米国と同水準であり、有意な差は確認されなかった。これらの結果から、中国ではTAの指導が充実しており、学生にとって学習支援の重要な役割を果たしていることが示唆される。最後に、授業以外で教員との接触のしやすさ（図5右）について調査したところ、中国の学生が最も高い評価（ $M=4.83$ ,  $SD=0.990$ ）を示し、91.7%が「満足」と回答し、他の2カ国との間には有意な差が確認された（ $p<.001$ ）。次いで米国の学生も比較的高い満足度を示しており（ $M=4.60$ ,  $SD=1.010$ ）、学外での議論や交流が活発であることが示唆される。日本の学生の評価は他国に比べて有意に低く（ $M=4.08$ ,  $SD=1.166$ ）、意見交換の機会

が限られている可能性があることが分かる。この調査結果から、中国の学生は教員やTAの指導に対する満足度が高く、授業外での意見交換の機会も豊富であることが分かる。米国の大学院生も、学習支援体制やディスカッションの機会に恵まれていると考えられる。一方、日本の学生は特に授業外での意見交換の機会が少なく感じている可能性があり、今後の教育環境の改善が求められる。日本の大学では、学生同士の議論や教員との交流の場を増やし、よりインタラクティブな学習環境を提供することが重要な課題となる。

図5 あなたの学部・学科における教育経験について、次の点での満足度を示してください。



注釈：満足度は「1：非常に不満」から「6：とても満足」までの6段階で評価されている。

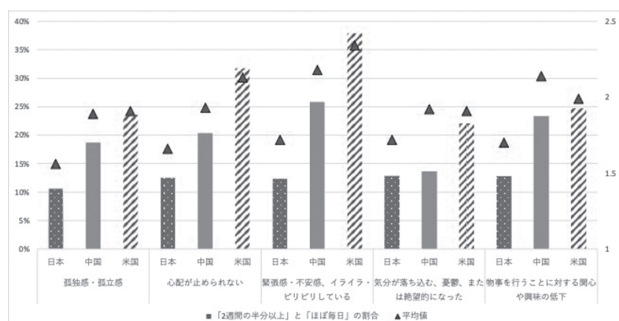
#### 4.4 学習レベル

学習レベルについては、学生のメンタルヘルス、満足度、帰属意識など学生個人の状態に関する項目を調査した。メンタルヘルス（図6）に関して、全体的には40%以下の学生が精神的な問題に悩んでいると回答し、特に米国の学生は孤独感や心配、緊張、不安感を強く感じていることが明らかとなった。米国の学生（孤独感 $M=1.91$   $SD=0.974$ 、緊張・不安感 $M=2.34$   $SD=0.988$ )は、他国（日本、中国）よりも有意に強いストレスを感じており（ $p<.001$ ）、学業や生活における精神的な負担が大きいと考えられる。一方で、日本の学生は、中国との間には有意な差は確認されなかったが、他国と比較して精神的な問題を抱えている割合が低く、特に「2週間の半分以上」や「ほぼ毎日」と感じる割合は比較的小さいことが示された。学生の満足度（図7）に関して、米国の学生は学問的経験に関して有意に一番高い満足度（90.9%）を示しているが（ $p<.001$ ）、社会的経験（大学生活や友人関係など）では有意に低め（73.8%）の満足度を示した（ $p<.001$ ）。全体的に、米国の学生は高い満足度を示しているものの、社会的経験に関しては有意に低めであり、精神的な健康との関連がある可能性があ

る。対照的に、日本と中国の学生は満足度がやや二極端であり、特に社会的経験に関する満足度の違いが強調される結果となった。帰属意識に関しては、図8が示すように、中国の学生は全体的に非常に高い帰属意識を示しており、すべての項目において85%以上の学生が「ややそう思う」「そう思う」または「とてもそう思う」と回答している。また、各設問に対する同意度も、日本および米国の学生と比較して有意に高い傾向が見られた。例えば、「授業料に見合う教育的価値」に対する評価では、中国の学生の平均値は5.15 (SD = 0.950) であり、次いで日本は4.30 (SD = 1.046)、米国は4.15 (SD = 1.278) となっており、3か国間には有意な差が確認された ( $p < .001$ )。

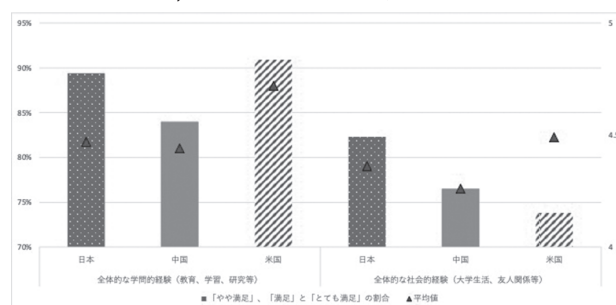
教育の価値を除けば、米国の学生は日本の学生よりも高い帰属意識を示し、全体的に米国と中国の学生は強い帰属意識を持っていることがわかった。一方、日本の学生はメンタルヘルスへの心配は少ないものの、帰属意識が最も低いという結果となり、日本の学生が所属大学に対してあまり強い帰属意識を持っていないことが示唆される。総じて、米国の学生はメンタルヘルスに関連する問題が多く、学問的・社会的経験への満足度が高いことがわかった。中国の学生はメンタルヘルスへの配慮が高く、教育の価値や帰属意識に関して最も高い評価を示した。日本の学生はメンタルヘルスへの心配が少なく、帰属意識も低いという結果が示される。この結果から、各国の学生の精神的健康と大学生活に対する感じ方、満足度の違いに焦点を当てた支援が必要であると考えられる。

図6 過去2週間で、以下のような問題に悩まされたことがありますか？



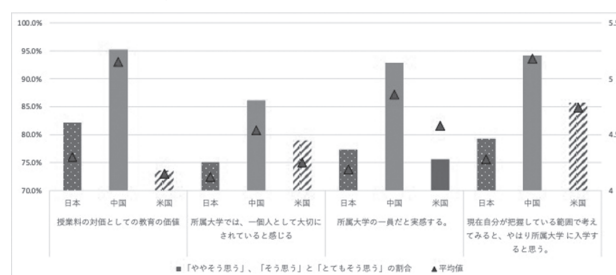
注釈：頻度は「1：なかった」から「4：ほぼ毎日」までの4段階で評価されている。

図7 あなたの大学での経験／教育における以下の項目について、満足度を示してください。



注釈：満足度は「1：非常に不満」から「6：とても満足」までの6段階で評価されている。

図8 以下の記述について、どのくらい同意するか、選択してください。



注釈：同意度は「1：まったくそう思わない」から「6：とてもそう思う」までの6段階で評価されている。

## 5. まとめと考察

本研究は、日本・中国・米国の3か国における高等教育の現状と課題を明らかにするため、3か国の学生経験をマクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルに分類し、各レベルでの結果を比較研究した。これにより、それぞれの国の特性や共通点を分析した。

まず、日本の分析結果に注目すると、日本の大学は、性別や文化的背景の多様性の尊重については、日本は米国や中国に比べて遅れていることがわかった。これは、日本の大学におけるDEI関連の支援や啓発活動が、他国と比較して十分に進んでいないことを示唆している。大学教育は、講義形式が主流であり、授業科目の質、受講しやすさや豊富さについては比較的高い満足度を示しているが、創造的思考や応用に関する項目では、中国や米国の学生に比べて低い評価がされている。この教育形式は、学生と教員や学部・学科とのコミュニケーションの機会が少なく、また授業外での意見交換の機会も限られていることを示唆している。したがって、日本の大学では、学生同士の議論や教員との交流を促進し、よりインタラクティブな学習環境を提供することが今後の重要な課題となる。また、学生のメンタルヘルスに関しては、日中米の比較において興味深い傾向が見られた。一般的

に、日本の学生は中国や米国の学生に比べて、精神的な問題を抱えている割合が低いとされている。これは、教員や学部・学科との関わりが少なく、帰属意識が相対的に低いにもかかわらず、学生が比較的自由で自律的な大学生活を送っていることが一因と考えられる。そのため、日本の学生は孤独感やストレスを感じる場面が少なく、メンタルヘルス面では比較的安定している傾向がある。しかしながら、教員や学部との接点の少なさや帰属意識の低さが、学生の学習意欲や学業成果にどのような影響を与えているかについては、今後さらに検討する必要がある。

一方、中国では、授業外での意見交換の機会や講義、必須科目の提供、図書館などの研究資源の充実度について、学習・研究支援への評価が3か国の中で最も高い結果となった。これは、中国政府や大学が積極的に支援制度を実施してきたことを示唆している。中国の大学は、多様な授業が提供されており、学生にとって選択肢が非常に豊富であることがうかがえる。一方で、学修強化プログラムの設計や、学生への情報提供、アクセス体制に関しては、他国と比較して利用上の障壁が存在している。また、授業の質の保証および管理の面においても、依然として改善の余地があると考えられる。大学の風土についても、全体的に包摂的な環境を提供しているとの高い評価が得られた。しかし、大学レベルの満足度は高い一方で、学部・学科レベルの満足度が低く、大学と学部・学科の間にギャップが見られる。このギャップは、理論と実践の間のズレに起因している可能性があり、今後の検討が必要である。また、中国の学生のメンタルヘルス問題は、日本の学生よりも有意に高いレベルにあることがわかる。近年の中国経済の不景気により、大学卒業生の就職率は厳しくなり、学生はこの環境でさまざまなストレスを抱えていると考えられる。しかし、学歴社会が依然として根強く残る中国では、学生は大学教育の価値を高く評価している。さらに、中国の学生は教育の価値と所属大学への帰属意識が3か国で最も高いという結果が出た。これは、中国からの本調査の参加校の教育の質が高く、学生と大学との関わりが深いためであると考えられる。

他方、米国では、アジア諸国の教育とは異なり、アクティブラーニングが一般的であり、学生が自ら考え、議論し、応用する機会が多い。このため、概念の説明やアイデアの統合といった項目において、日本や中国の学生と比較して自信を持っていると考えられる。さらに、学習支援体制やディスカッションの機会にも恵まれてお

り、授業科目にとどまらず、学外活動や学修強化プログラムに対する評価も特に高い。これにより、学生は幅広い知識を習得する機会を得ている。しかし、本研究では、米国の学生が3か国の中で最も深刻なメンタルヘルス問題を抱えていることを指摘している。これは、米国における個人主義の強さと関係していると考えられる。他者に頼ることが弱さと思われやすく、成功は自己責任であるとする価値観が強いため、米国の学生は幼少期から激しい競争にさらされる。一方、中国や日本では、家族や友人との密接な関係が心理的サポートとして機能しやすく、精神的な負担を軽減する役割を果たしている。また、中国の学生は「忍耐（耐える文化）」、日本の学生は「和を重んじる文化」の影響を受けており、メンタルヘルスの問題を公にすることが難しい傾向がある。このため、米国ではメンタルヘルスに関する意識が高く、問題が可視化されやすいことも、米国の学生のメンタルヘルス問題がより深刻に見える要因の1つと考えられる。

上述したように、本研究は、SERU調査に参加した日本、中国と米国の大学の学生経験を比較することによって、この3か国の大学教育の特徴と課題を解明した。国ケースでの比較研究は数多く実施されてきたが、日本、中国と米国の大学生の学習経験に着目した研究はいまだに殆ど見られたことがない。本研究は3か国の学生経験について具体的に考察を行っており、理論的および実践的な示唆を提示する試みとして意義があると考えられる。なお、本研究で使用したのは、SERUという国際学生調査のデータであり、調査対象はごく一部の研究大学に限られている。そのため、日本、中国、米国のすべての大学が参加しているわけではなく、データの範囲に起因する分析結果の限界が存在する。より偏りのない結果を得るためには、今後の研究にデータの選択への配慮は必要であると考えられる。また、本研究は質問紙調査に基づいた結果であるため、参加者の回答には社会的・文化的背景による影響が含まれている可能性がある。したがって、本研究の知見は、学生の学習経験を理解するための一つの視点として提示するものであり、一般化には慎重な配慮が必要である。研究結果を活用する際には、各国・地域における学生の社会文化的背景を十分に考慮することが求められる。

受付 2025.4.14 / 受理 2025.8.8

#### AI使用に関する注記

本論文の作成にあたっては、文章の明確性と可読性を

高めることを目的に、OpenAI社が提供するChatGPT (GPT-4o) を日本語文法・文章校正ツールとして活用しました。具体的には、初稿の執筆後、日本語文法の誤りの修正、冗長な表現の簡素化、表現の統一、および読者の理解を促す文体の調整などを行いました。なお、最終的な内容は著者自身が確認・修正を加えたものです。

## 参考文献

Astin, A. W. (1997). *What matters in college: Four Critical Years Revisited*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

市川昭午. (2003). 高等教育システムの変貌. 高等教育研究, 6, 7-26.

小方直幸. (2008). 学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム. 高等教育研究, 11, 45-64.

大藪俊志. (2022). 大学における地域連携活動：現状と方向性. 佛教大学総合研究所紀要, 29, 39-52.

Oba, J. (2007). Incorporation of national universities in Japan. *Asia Pacific journal of education*, 27(3), 291-303.

Cabrera, A. F., Nora, A., Terenzini, P. T., Pascarella, E., & Hagedorn, L. S. (1999). Campus racial climate and the adjustment of students to college: A comparison between White students and African-American students. *The Journal of Higher Education*, 70(2), 134-160.

Carini, R. M., Kuh, G. D., & Klein, S. P. (2006). Student engagement and student learning: Testing the linkages. *Research in higher education*, 47, 1-32.

川合弘敏. (2016). 資料コーナー：ものづくりにおける理工系人材の戦略的育成. 電気学会論文誌 D (産業応用部門誌), 136 (9), NL9\_10.

Kuh, G. D. (2009). The national survey of student engagement: Conceptual and empirical foundations. *New directions for institutional research*, 141, 5-20.

Cranfield, D. J., Tick, A., Venter, I. M., Blignaut, R. J., & Renaud, K. (2021). Higher education students' perceptions of online learning during COVID-19—A comparative study. *Education Sciences*, 11(8), 403.

邢晓 & 刘亚敏. (2023). 博士生课程学习成效的影响因素研究——基于32名博士生课程学习经历的访谈资料分析. *研究生教育研究* (02), 34-42. doi:10.19834/j.cnki.yjsjy2011.2023.02.06.

黄玲. (2022). 博士生跨学科学习经历, 科研能力与高校跨学科培养关系探究——跨学科学习动机的中介作用. *中国高教研究* (03), 24-29+36. doi:10.16298/j.cnki.1004-3667.2022.03.04.

齊藤貴浩, 和嶋雄一郎, 廣森聡仁, 安部有紀子, 藤井翔太, & 前原忠信. (2016). 世界的研究大学との協力による学生経験調査の実施と阪大生の特徴に関する考察: Student Experience Survey in Research Universityへの参加と実施. 大阪大学高等教育研究, 4, 1-14.

佐藤浩章. (2019). 教学マネジメントの構造：システムとして

の4層モデルの提案. *IDE：現代の高等教育*, (612), 20-25.

佐藤万知, 中西勝彦, 勝間理沙, 藤田風花, & 大野真理子. (2023). コロナ禍の学生経験と大学観・大学生観：2020年度入学者のインタビューに基づいて. 名古屋高等教育研究, 23, 161-181.

Sato, Y., Bista, K., & Matsuzuka, Y. (2022). COVID-19 Pandemic's Impact on International Students in Japan and the United States: Comparative Study From National and Institutional Context. *Journal of Comparative and International Higher Education*, 14(n3B), 44-64.

秦茜, 王建梁 & 彭仁孚. (2025). 大学生参与高校治理的理论基础, 现实困境与可行路径. *当代教育论坛* (01), 27-34. doi:10.13694/j.cnki.ddjylt.20241101.001.

Stoet, G., & Geary, D. C. (2018). The Gender-Equality Paradox in Science, Technology, Engineering, and Mathematics Education. *Psychological Science*, 29(4), 581-593. https://doi.org/10.1177/0956797617741719

Servant-Miklos, G., & Noordzij, G. (2021). Investigating the impact of problem-oriented sustainability education on students' identity: a comparative study of planning and liberal arts students. *Journal of Cleaner Production*, 280(2), 124846.

Solorzano, D., Ceja, M., & Yosso, T. (2000). Critical race theory, racial microaggressions, and campus racial climate: The experiences of African American college students. *Journal of Negro education*, 69, 60-73.

Son, C., Hegde, S., Smith, A., Wang, X., & Sasangohar, F. (2020). Effects of COVID-19 on college students' mental health in the United States: Interview survey study. *Journal of medical internet research*, 22(9), e21279.

陳麗蘭, 矢田尚也, 中口悦史, 川嶋天津夫. (2025). コロナ禍前後における本学大学院生経験の経年変化に関する考察—内部質保証の視点から—. 大阪大学高等教育研究, 13, 1-8.

Chen, L. and Kawashima, T. (2025). Assessing the Quality of University Education from the Student Voices. *Assessment Update*. https://doi.org/10.1002/au.30433

Chen L.\*, Kikuchi A., Wajima Y., & Kawashima T. (2024). The Perceptions and Experiences of Graduate Students: Evidence From a Japanese National Research University ISSN: 2189-1036 – *The IAFOR International Conference on Education* – Hawaii 2024 Official Conference Proceedings https://doi.org/10.22492/issn.2189-1036.2024.58

Chen, Lilan & Kikuchi, Akari & Wajima, Yuichiro & Kawashima, Tatsuo. (2024). Disciplinary Variations in Graduate Student Experiences: A Study of Osaka University, *SERU Brief*, Center for Studies in Higher Education, University of California at Berkeley. https://escholarship.org/content/qt19w3p811/qt19w3p811.pdf

- Chuah, C. W., & Sri Ramalu, S. (2011). Students satisfaction towards the university: does service quality matters?. *International Journal of Education*, 3(2), 1-15.
- 中村周史. (2022). コロナ禍における大学生の学習意欲に関する研究. 総合政策研究, 30, 59-67.
- 西村政子, 猪又由華里, & 趙彩尹. (2023). 日本の大学における内なる国際化の現状についての一考察—公立大学の取組みの実態を中心に—. 教育経済学研究, 3, 1-13.
- 濱名篤, 塚原修一, 白川優治, 深澤晶久, 合田隆史, 山田礼子, & 杉谷祐美子. (2024). 人口減少社会における大学の役割の再構築と地域創生人材育成. 教育総合研究叢書, (17), 1-14.
- 羽田貴史. (2007). 大学管理運営の動向. 大学の組織変容に関する調査研究. COE研究シリーズ27, 広島大学高等教育研究開発センター.
- Pascarella, E. T., & Terenzini, P. T. (2005). *How College Affects Students: A Third Decade of Research. Volume 2*. Jossey-Bass, An Imprint of Wiley. 10475 Crosspoint Blvd, Indianapolis, IN 46256.
- Hussain, M., & Jones, J. M. (2021). Discrimination, diversity, and sense of belonging: Experiences of students of color. *Journal of Diversity in Higher Education*, 14(1), 63.
- Pekrun, R., Goetz, T., Titz, W., & Perry, R. P. (2002). Academic emotions in students' self-regulated learning and achievement: A program of qualitative and quantitative research. *Educational psychologist*, 37(2), 91-105.
- Benaraba, C. M. D., Bulaon, N. J. B., Escosio, S. M. D., Narvaez, A. H. G., Suinan, A. N. A., & Roma, M. N. (2022). A comparative analysis on the career perceptions of tourism management students before and during the COVID-19 pandemic. *Journal of Hospitality, Leisure, Sport & Tourism Education*, 30, 100361.
- Marx, R. A., Maffini, C. S., & Peña, F. J. (2024). Understanding nonbinary college students' experiences on college campuses: An exploratory study of mental health, campus involvement, victimization, and safety. *Journal of Diversity in Higher Education*, 17(3), 330.
- 溝上慎一. (2021). ハイブリッドな学びと大学教育のイノベーション. IDE: 現代の高等教育, (635), 10-14.
- 村上正行. (2023). 大学における教育DXの可能性. 名古屋高等教育研究, 23, 261-278.
- 山田剛史. (2018). 大学教育の質的転換と学生エンゲージメント. 名古屋高等教育研究, 18, 155-176.
- 熊艳青, 徐丹 & 刘声涛. (2019). 研究型大学转专业意向学生学习经历的实证研究. 当代教育论坛 (01), 48-57. doi:10.13694/j.cnki.ddjytl.2019.01.006.
- Yonezawa, A. (2011). The internationalization of Japanese higher education: Policy debates and realities. In *Higher education in the Asia-Pacific: Strategic responses to globalization* (pp. 329-342). Dordrecht: Springer Netherlands.
- 李运福, 陆根书 & 李珍艳. (2023). 大学生课程学习经历对能力发展影响的院校差异——陕西高校毕业生就业创业跟踪调查(2020年度). 教育评论 (02), 69-76. doi:CNKI:SUN:JYPL.0.2023-02-011.
- 梁秋莎. (2024). 大学生学习经历满意度IPA分析研究——基于高校中外合作办学机构与普通学院两种培养模式的比较. 科学咨询 (科技・管理) (06), 156-159. doi:CNKI:SUN:KXZC.0.2024-06-039.
- Lo, N. P. K. (2024). Cross-cultural comparative analysis of student motivation and autonomy in learning: perspectives from Hong Kong and the United Kingdom. In *Frontiers in Education* (Vol. 9, p. 1393968). Frontiers Media SA.